

Y-PAC journal vol.3 現在と歴史

Text by shota inoue

先日、塩野七海氏の名著『ローマ人の物語』を読み終えた。これは、いささか主観的、想像的な面もあるが、古代ローマの誕生から共和制、帝政を経て滅亡するまでの一千年以上を細やかに、そして歴史を物語として読者が面白く読めるように描かれた名著だ。自分は元来から歴史というものが好きなのだが、歴史にはただ単に面白いだとか、好奇心だとかだけでなく重要なものを含んでいるのではないか、と思っている。今回は、広大な領地を支配するまでになった古代ローマのシステムの中で、自分が興味深い、と思ったことを挙げたいと思う。

まずは奴隷制について挙げる。古くから地中海世界では奴隷制は存在し、古代ローマも例外ではなかったが、古代ローマでは、奴隷はただ酷使されるだけの存在ではなかった。農園で過酷な労働を強いられる人達もいたが、各家に数人の場合も多く、親近感が高かった。指導者階級では幼少の頃から同じ年頃の奴隷も一緒に教育を受けることによって、彼らを秘書として働く信頼のおけるパートナーとした。そして、自由を得ることも決して難しいことではなかった。私財を貯めて自由を買い取ることもできたし、所有者が永年の恩に報いて自由を与えることもあった。そして、奴隷の子供はローマ市民権を有し、他のローマ市民と変わらない権利を有した。古代ローマには階級はあったが流動性が高く、それが社会の活力となった。

もう一つ挙げれば、ローマ帝国の統治システムがある。古代ローマは帝政に移行してからは基本的に専守防衛であった。つまり、地中海を囲い込むほどの広大な地を有するまでになった古代ローマの領土拡大は専ら共和制において行われたのだ。逆にいえば、そこまで広大な領土を円滑に支配するために、古代ローマは共和制から帝政に移行したといえる。自国の維持は、最も重要な問題である。それを、ローマ帝国は宗教や主義、武力でなく安全保障とインフラ整備によって成し遂げた。ローマ帝国は様々な思想や宗教を持つ人々を内部に抱えた多民族国家だった。その多くの民族をまとめ、一つの国家として保って行く為に、防衛線を強化して外敵からの安全を保障し、街道、上下水道等の高度なインフラを帝国各地で整備することによって、帝国内にいるほうが圧倒的に“得”であることを実感させた。税金の額も抑えられ、収入の十分の一と当時でも現在でも信じられないほど安い。そしてローマ帝国は、その安全のもとに、帝国内に一大経済圏を創り出し、繁栄を享受した。

歴史に関する文献を読んでいくと、時代や場所によって価値観は異なり、自分の価値観は絶対ではないことがわかる。また、今回取り上げた奴隷、帝国といったシステムを現在の倫理において単に悪だと嫌悪するだけでなく、評価できる点もあったのだと発見できる。逆に現在の価値観や社会に疑いの目をもつこともできる。

現在を生きる自分は、何を思うも何を決めるも、現在の周囲の状況に影響を受けずにはられない。それによってあたりまえとか善とか悪が決められる。建築にせよ何にせよ、新しいものをつくっていく為には、そういったものを振り切って客観的な位置に立つよう勤めなければならない。その助けに、歴史というものは有効ではないかと思う。

June 15 2008